

Fast life, slow life

村越真のオリエンテーリング日誌 2010年4月-2010年5月

永遠に来ないように思われたいたアジア選手権もあっさり終わり、時はまた滝のように流れ出す。



▲松代ロゲイニング(5月9日)は、よもやの大ブレーキ。山頂付近で、ちょっと大げさに写真を撮ってみたが、気分はこんな感じ。

■カウントダウン

4月4日

インカレでの結果が悔しかったようで、オリエンテーリング部の若山が、「アナリシスを見てください」と言ってやってきた。二人でアナリシスを検討した結果、アタックまわりの地図が全然読めていないという結論に達した。「これから100レース分、各コントロールのアタック周りのプランニング練習をしたら、インカレできっと入賞できるよ」と言ったら、約2週間たって、クロッキーブックに描きためたプラン図を持ってきた。それだけでも、目標に向けての大きな一歩だ。たいていのオリエンティアは、このレベルのハードささえクリアできない。

しかし、驚きをもって別のところにあった。インカレの数日後、はじめて描かれたプラン図には、同心円状の饅頭のような等高線が描かれていた。そ

れは彼女にとっては「丘」という以上の何者も意味していなかった。ところが2週間後のプラン図では、地形は多様な形に変化していた。描かれた特徴的な尾根の出っ張りや二重になった稜線は、彼女の中で地形の個別の特徴が意味を持って記憶に残るようになったことを意味する。美術科の学生だという下地はあるかもしれないが、2週間の変容ぶりには、指示をしたこちらがびっくりした。100レース分やれば、インカレ入賞も嘘ではなさそうだ。

4月8日

春のJ R講習の初回。午後JOAの事務所にいって、伊藤さんとアジア選手権打ち合わせ。夕方は、代々木公園でジョグ。身体は重いが、ストレス発散の運動でもしないとやってられない。

4月10日

地図調査やら9月のロゲイニング大会のことをロブと相談するため、三島の選考会にでかけた。まとまった運動がしなかったが、往復する気力がなかったのも、行きは輪行(りんこう:自転車バス・電車等の手荷物で運ぶこと)で三島まで。清水駅で「輪行ですか」と声を掛けられる。昨今輪行をする人は少数派、互いに親しみが沸くんだよなと思ひ、「自転車やるんですか?」と反応したら、「競輪選手です」。プロとはお見それしました。

会場にはたどり着いたものの、ロブはいなかった。激務で疲れて家でダウンしていたようだ。その家の前までいったのに。押し掛けて、相談ごとを済ませる。帰りの50km近い自転車は辛かったが、こぎ続けられる! やっぱ大会会場が最良の薬?

4月14日

静岡駅で清水さん、JTBとでアジア選手権のバス輸送の打ち合わせ。見積もりから粘って添乗員の人数を削減。バスの宿泊の集計は清水さんに丸投げした。1年前のスキーO世界選手権の打ち上げで誘った時には、こんな大変な作業になるとは彼女自身予想もできなかっただろう。愚痴もこぼさず淡々と仕事をこなす彼女に感謝!

4月15日

昨日に続いて時々不整脈が出るので、トレーニングは休みにしたが、体調はよい。この日、船橋さんがスポーツ振

興基金の内示があったことを淡々と伝えてきた。アジア選手権の130万円はともかく、選手強化の700万円は、減額はおろか助成そのものが厳しいと感じていただけに僕自身びっくりした。早速強化委員長のカッシーに伝えたとこ、**「キーボードを打つ手が震える」**という返事が返ってきた。彼自身がその重みを一番感じているのだろう。

競技的なオリエンテーリングに挑戦して約30余年、初めて公的な資金で日本代表が国際大会に出るのだ。名実ともに日本代表と胸を張り、海外選手と遠征費の話が出た時にも、僕らは遠慮がちに**「全部自費なんだ・・・」**と言わなければならなかった。でも今年は、**「**%はガバメントから助成してもらっている」**と言える。その誇りと重さが、選手にとってよい刺激になることを願う。

それと同時にこんなに簡単にももらえるものに、どうしてチャレンジしてこなかったのだろうという気持ちも強くなった。スポーツだと言い張りながらも、どこかでマイナー意識が強かったのかもしれない。早くそのことに気付けば、選手ももっと本質的なことに専念できたのという一抹の残念さもあった。

4月17日

アジア選手権の運営手伝いの依頼のため名大・楯山に出かけ、その練習に参加した。勢いのあるクラブは学生の動きもきびきびしている。地元での大会開催とは言え、大会の手伝いなんてよけいな仕事に他ならないが、担当の井上君を始め、積極的に名乗りを挙げてもらった数人の部員たちには気持ちよく仕事を引き受けてくれ、感謝の言葉もない。学生たちに混じって、オリエンテーリング。

4月18日

秦野ロゲイニング。体調が悪くネガティブになりがちな利佳ちゃんをいかに説得するかがこの日のポイントだった。常に区間タイムを計り、「この距離に、これだけかかったの、ここまでのける。」「このエリアをこう回れば、時間が迫っても、確実にゴールに戻れる」と、徹底してデータに基づく説得をした。CPは一つ取り残したが、最後まで走った充実の3時間だった。

帰りに鶴巻温泉のそばやでくつろいでいると、大島から来た参加者に出会

った。「おもしろいだけでなく、今の教育に一番不足しているものがある。地元の子どもたちに是非やらせたい」と絶賛だった。こういう人たちに応えるプログラムの提供もまた、オリエンテーリング愛好者の社会的使命の一つではないだろうか。

4月24日

40歳も後半になると、仕事も家庭も落ち着き、人生を振り返る余裕ができるのか、出身中学校、高校とも同窓会ばかりである。中学はここ3年連続だったが、いずれも出席できなかった。昨年の同窓会の幹事は、テニス部でペアを組んでいた奴だったので、終わったあと写真を送ってきてくれた。ショックだったのは、誰一人顔が分からなかったことだ。

そんな不安もあったが、今回は高齢の先生とお会いする最後のチャンスかと思って、出かけることにした。楽しくはあったが、異邦人気分は35年前と変わらない。自分が異邦人であることを意識しはじめたという意味でも、中学は僕の原点だったことを再認識した。

4月25日

アジア選手権の準備を集中してやれる最後の週末がやってきた。この週末を乗り切れば現地だ。現地にいけば、運営の高揚感で乗り切れる、そう言い聞かせて終日仕事。アジア選手権へ、カウントダウンの日々。

■何も考えない

4月26日

大学院進学に絞って、卒業制作は「先生がまだ始めちゃだめと言っているので、暇です」という静大の若山に手伝ってもらい、アジア選手権の看板づくりをする。18年前のアジア環太平洋選手権の時も、こうやって研究室にオリエンテーリング部の学生を連れ込んで、夜遅くまで準備した。

野外教育センターがいっぱいであふれた件については、切り札の福田さんに電話して、この段になってホテルに移ってもらうことにした。「しんちゃんも困って、言いやすい人に頼んだのだから、お手伝いしますよ」と、頼れる一言をもらい、ややほっとする。

4月29日

静大で若山を拾い、静岡駅で田代号と落ち合い、清水さん、伊藤さんの二人を乗せて、岐阜に向かう。順調に鞍ヶ池のSAまで来た時、岐阜の資材にユニットがないことが発覚し、田代号から清水さんをもらいうけ、その代わり大量の荷物を移して、田代号をユニットを取りに戻らせる。このきわどさ感

が大会の魅力でもある。

ほぼ予定通りの13時ごろ、中津川に着く。市役所分庁舎であるにぎわいプラザの1階では、数多くの市職員の方がパーティションを立てたり、机を運んだりしている。最初は感触が今一つだが、大会規模や参加国を聞く中で、中津川も本腰を入れて取り組んでいたというのだ。その象徴的な出来事が、市長さん直々のスプリント大会の市民クラス出場と、開会式での挨拶だった。しかも、自ら大会に参加される予定と聞いて、その熱意に敬服した。

4月30日

午前中からイベントセンターの準備、そして受付。1年ぶりの友人に会うと、自然に疲れを忘れてハイパーになる。夕方には市長主催のレセプションも設けていただいた。中津川市全体のバックアップには、こちらもずいぶん元気づけられた。50年間でもっとも忙しい誕生日はこうして終わった。

5月1日

根の上高原でスプリント競技。天気はよいが、風が寒く、立ちっぱなしでアナウンスする表彰式は寒さが身に染みる。初日ということもあって、大会の実感は乏しい。ようやくできた時間がかろうじて23分走るが、すっきり感がない。

5月2日

会場の人数も増え、大会気分が盛り上がってきた。今や中年の域に達して強化委員長の職にあるカッシーが男子エリートで優勝。呼び出しの音が思わず上ずってしまう。

宿舎と会場が近く、夕方は少し時間があつたので、ゆっくり50分のジョグに出かける。前の晩に、山西先生が30年前にこの地で開催されたフォークジャンボリーの時、近所に住むAさんに、「子どもはなぜ走るか？」という禅問答のような問いを投げかけたという話を思い出した。山西先生の答えは「楽しいからだよ」。前の晩はなんとなく違和感を感じていたが、走りながら、「何も考えていないからだ」という僕なりの答えに思い至った。どんなスピードでも、この一歩がづらいことは滅多にない。先のこと、これから走るべき距離の事を考えることがつらさにつながるのだ。

先のことを考えたら、国際大会をやるなんて気にはなれないだろう。それは走ることを忘れてしまった大人のようなものだ。先の大会のことを心配ばかりして過ごしたここ数ヶ月のことを、ちょっと反省した。

5月3日

新城へ移動。B&Gセンターで受け付けを2時間ほど手伝った後、野外教育センターで開かれる国際セミナーへ移動する。マッピング、エリート、普及の3つのセッションが開かれ、全部で20人強の参加者があつた。中国、香港、韓国からもそれぞれ参加してくれ、こじんまりとしながらも、アジア地区の情報交換の場として機能させることができた。

5月4日

さすがに眠くなってきた。暑く、熱い一日。リ・ジーの素晴らしいタイムにも、小泉の優勝にも興奮した。熱中症や疲労での要救が数件発生。

5月5日

最終日のリレーがやってきた。選手権クラスはあるものの、個人に比べると緊張度は低い。ITチームほどではないにしても、大会の間、睡眠不足になることは目に見えていた。実際、朝起きるのが辛いと感じる日もあつたが、日を追うごとに元気になる自分を感じた。昨年のスキーOの時も辛い準備の日々、大会に来ればきっと元気になると思いつけていたが、今回もその期待は裏切られなかった。献身的な運営者、参加者の満足、その全てが元気の素となる。この大会の運営で一番の心配事だったバンケット後の2時間以上のドライブも、一瞬眠くなっただけで無事帰還。

5月6日

朝はやや辛いが気持ちよく夕方走れた。総務としては会計の締めやらなんやらと、やるべきことは山積みだが、少なくとも大会は無事終わった開放感を味わう。

■広がるアウトドアの世界

5月8日

翌日の松代でのロゲイニングのための講習会のため、東京に前泊して6:30に起きて、所沢から奈緒さんの車で松代へ。アジア選手権の疲労は残っていたから、講習会がなかったら松代へもいかなかったかもしれない。大会直前は、この講習会とロゲイニングに本当に健康な身体で参加できるのだろうか？と思いつけていたが、人間意外と倒れないものだ。地元新聞記者の方も含めて10名以上の参加があり、充実した講習が楽しめた。

5月9日

史跡の多い松代でのロゲイニングは、さながら歴史探訪の旅。川中島の合戦

での信玄と謙信の一騎打ちの像とか山本勘助の墓も、歴史好きなら堪えられないだろう。さらに、山中の山城や古墳群など、こんな機会では訪れることができないポイントも目白押し。山中のポイントの多い今回のロゲイニングは体力的にも本格的なものであったが、その一方で、歴史探訪の一手段としても楽しめるイベントでもあった。ロゲイニングの可能性をまた一つ発見した。

前半確実に点を重ねたが、アジア選手権を数日前に終えたトレーニング不足の身には辛く、中盤の500mの山越えでは、思わぬブレーキ。りかちゃんに全くついていけないのだ。彼女をプッシュしたことは何度もあるが、彼女にプッシュしてもらって羽目になるとはね。単なるエネルギー不足か、登りが終わると、なんとか走れるようになった。周り方の戦略に成功したようで、トップで圧倒的な走力差のある柳下・山内チームに100点差で、総合でも2位。

5月11日

朝からやや眠気があったが、昼頃から頭全く働かずダウン寸前。思うに二日前のレース後、何も食わずに家まで帰ったことが血糖値に影響していたのかも。甘いもの取って少し回復

5月15日

大学の公開講座の一環で、登山家の岩崎元郎さんと県警の山岳救助隊長の眞田さんを招いての講演会を開催した。岩崎さんは本当に中高年のアイドルで、何人もの人が一緒に写真に収まりにやってきましたが、眞田さんの救助現場の経験に基づいた講演も僕には興味深かった。

携帯で電話する時は必ず110番か119番に直接に。なぜなら、現在6割以上の警察・消防に位置探知システムが組み込まれ、GPSのついた携帯では、確実に位置が把握できるからだ、といった実践的なヒントが満載だった。3人とも山に関わるプロフェッショナルだが、三者三様の内容の絡み合いが楽しい。また一つ世界が広がる感じがした。

5月16日

翌日は、地元登山愛好者向けに公開講座として読図・ナビゲーション講習。若い娘さんがいたので、話をしてみたら、なんと静大の学生だった。ワングルでも山岳部でもなく、自分で楽しそうだから山を始めたのだが、知識やスキルがないと怖いので、この講習をウェブで探して受講したのだそうだ。最近、そんな若い女性が増えている。

5月20日

昨年の秋以降作業していた岩波のトレラン本が完成して見本が送られてきた。表紙や裏表紙の美しさや、各章扉の写真風景の雄大さにはうっとりするばかりだった。前の本より一回り増えたボリュームも、この5年間のトレランの世界の変化を物語る。久しぶりに論文執筆に復活。

5月22日

JOAの理事会プレミーティングの後、アジア選手権の打ち上げをITチームの要、的場氏がセッティングしてくれた。「今回は次の大会の運営に誘われることもないかと思しますので、ぜひご参加を」のメールに笑わされた。

5月23日

理事会および総会。12月の理事会から、時には理事間の考え方の違いから険悪なムードになった時もあるし、僕自身完全にうまく対応できとは言えない。しかし、言いたいことを丁寧に掘り起こす作業を根気よく続けることで、具体的にどう行動すべきかについてのかなり多くの指針が得られた。やるべきことは多いが、少しずつ晴れ行く気分。日本のオリエンテーリングが変わる。それはオリエンテーリングが日本のアウトドアスポーツを変えることでもある。

この数日の緊張感による眠りの少なさで、夕方はダウン寸前。山西先生に誘われた飲み会にも出ず、帰宅。珍しく新幹線全てで寝て、回復。結局睡眠不足なのか？

5月26日

ノースフェイスのプロモーション部の三浦さんが来る。3月以来続いている大きなトレラン大会の相談なのだが、話がでかいだけに、トップダウンで固めてもなかなか地元の動きがつかないようだ。地域を走るということが、何をもちたしてくれるのか、昨年企画した富士山一周イベントで、余すことなく感じた。それが行政に理解されないことに、アウトドアスポーツを愛好する者として、一抹の寂しさを感じる。

5月29日

森林公園でエバニューとフィールドライフのミニロゲイニング。新潟の藤島君に来てもらい、クイックOのデモンストレーションをしてもらう。さすが学校体育用品を多く手がけているエバニューだけあって、子どもたちが目を輝かせてクイックOに参加する様子が嬉しかった。

対象によって間口やクイックOだったり、ロゲイニングだったり、読図だ

ったりする。その入り口は究極のナビゲーションスポーツ、オリエンテーリングにつながっている。そういう構造とストーリーをうまく作り上げることができれば、オリエンテーリングの世界もアウトドアの世界も変わる。



▲静大のクラブ員を対象に新入生勧誘のためのワークショップを実施。「これ、絶対対活にも使えますね！」



▲中高年に大人気の岩崎さんはちびっこでびっくり。白髪の眞田さんは僕と3つしか違わないのでびっくり。



▲森林公園ロゲイニングでクイックOに興じる子どもたち(上)と、ミニロゲイニングを楽しむ親子。どちらもオリエンテーリングをやっている幸福感を感じられる瞬間だ。

(村越 真)